

実践のまとめ（第4学年 外国語活動）

三条市立月岡小学校 教諭 河上 洋平

1 研究テーマ

**相手に配慮しながら反応したり質問したりすることのできる児童の育成
～相手意識をもった言語活動の設定を通して～**

2 研究テーマについて

（1）テーマ設定の意図

平成29年告示小学校学習指導要領の外国語活動・外国語編では、外国語活動の目標について、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」としている。学習した語彙や表現の暗記ではなく、話すこと、聞くことによる言語活動を設定し、他者と関わるための素地を養うことを狙っている。外国語を用いて他者とコミュニケーションを図ることを通して、児童は相手の発話に反応したり、相手に興味・関心をもったりすることが考えられる。

しかし、自身の普段の授業を振り返ると、言語活動やコミュニケーションを図る場面が、児童同士の単なる情報交換となっていることがある。また、ゲーム的な活動を行うことで楽しい雰囲気にはなるものの、言語を用いてやり取りをするからこそ生まれる外国語学習の特性を生かした楽しさにつながっていないのではないかと考える。

そこで本研究では、外国語を用いたやり取りを通して、即興的に反応したり質問したりすることのできる児童の育成を目指したい。

（2）研究テーマに迫るために

① 相手意識をもった言語活動の工夫

外国語を用いたやり取りにおいては、相手がいることで初めてやり取りが生まれると考える。話し手は、聞き手がどのような状況や立場かを考えることによって、伝える内容を考えたり使用する語彙を考えたりするだろう。また、聞き手は話し手に反応することでコミュニケーションを円滑に行うことができると考える。質問をすることで、相手の情報を引き出したり、話し手の発話を促したりすることにもつながる。

このように、誰に対して伝えるのかという相手意識をもつことができるような言語活動を設定したい。

② 反応や質問を促すための学級掲示や教具の工夫

反応したり質問したりすることは相手とコミュニケーションを図る上で重要な要素の一つである。しかし、児童の中にはどのような場面でどんな反応をしたらよいか分からない児童もいるだろう。そこで、反応や質問の言葉を学級掲示として見える化し、いつでも活用できるものとする。児童にも反応や質問などが記載されたカードを持たせ、活動中には積極的に活用させるようにしたい。

（3）研究テーマに関わる評価

本実践の効果を探るために次のような方法を用いて評価する。

① 振り返りの記述分析

適切に質問や反応をすることができたかどうかを児童自身が振り返るために、質問や反応についての評価項目を設定する。やり取りの中で相手にどの程度、質問の言葉を使ったり反応したりすることができたか、その児童の割合を探る。

② 児童を抽出し、やり取りを記録する

あらかじめ抽出児童を決めておき、やり取りの様子を動画撮影し、記録に残す。抽出児童2名（1ペア）について、やり取りの中で質問や反応をしながら、2往復以上の会話のやり取りができたかについて調査、分析を行う。

3 単元と指導計画

（１）単元名

Unit 7 What do you want? (Let's Try!2 文部科学省)

（２）単元（題材）の目標

- ・食材の言い方や、欲しいものを尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しむ。
- ・欲しい食材などを尋ねたり要求したりして伝え合う。
- ・相手に配慮しながら自分の考案したメニューを紹介しようとする。

（３）単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
食材をはじめとする身近な事柄について、～do you want? や～, please? などを用いて、欲しいものを尋ねたり答えたりすることに楽しんでいる。	相手の好みのメニューを考案し紹介するために、相手に伝わるように工夫しながら欲しいものを尋ねたり答えたりして、気持ちとともに伝え合っている。	相手の好みのメニューを考案し紹介するために、相手に伝わるように工夫しながら欲しいものを尋ねたり答えたりして、気持ちとともに伝え合おうとしている。

（４）単元の指導計画と評価計画

（全5時間、本時4／5時間）

時数	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法 （評価方法は【 】内で記述する。）
1	・食材の言い方や、欲しい物を尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しむ。	◎市場にある食材やその数は、英語でどのように言うのだろうか。	知識・技能 日本語と外国語の音声の違い等に気付いている。 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。 【授業観察】
2	・欲しいものを尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しむ。	◎誰がどんなパフェを欲しいと話しているだろう。	思考・判断・表現 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合っている。 【振り返り】
3	・パフェについて、欲しい物を尋ねたり要求したりして伝え合う。	◎オリジナルパフェを作るためには、相手にどう伝えるとよいのだろう。	思考・判断・表現 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合っている。 【振り返り】
4 本時	・食材について欲しい物を尋ねたり答えたりして伝え合う。	◎オリジナルピザを作るためにどんな質問をしたり、質問にどう	主体的に学習に取り組む態度 外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮し

		う答えたりするとよ いだろう。	ながら、主体的にコミュニケーションを 図ろうとしている。【授業観察】
--	--	--------------------	---------------------------------------

4 単元（題材）と児童

（１）単元について

本単元では、前時までのやり取りで慣れ親しんだ語彙や表現を用いながら、２往復以上のやり取りを行うことができるように、児童にとって興味・関心の高い食材を扱う。欲しい物を質問したり答えたりするだけではなく、“How many～?” “Three, please.” など数を伝える表現を用いることで、５年生以降での教科学習においての文構造の気付きにつながっていくことが期待される。

（２）児童の実態

本学級（男子13名、女子7名）の児童は、どの教科でも教師からの発問やクラスの人意見に対して反応が良く、積極的に発言したり関わったりすることができる。外国語活動では、進んで英語を使おうと努力し、活動を通して英語に慣れ親しもうとしている。また、発表ややり取りの際には、相手の発言に対して進んで反応することができる児童もいる。

しかし、相手の発話を聞くだけでコミュニケーションが終わってしまう場面が多く児童に見られる。この単元を通して、相手に配慮しながら進んで反応したり質問したりすることができる児童を育てたい。

5 本時の展開（令和6年10月18日実施）

（１）ねらい

A L Tのジュリア先生のためにオリジナルピザを作る活動を通して、質問したり反応したりしながらやり取りをすることができる。

（２）展開の構想

本時のねらいを達成するために、次の二つの手立てをとる。

① 発話の必然性がある言語活動の設定

本時ではA L Tのジュリア先生のために、オリジナルピザを作る活動を行う。展開の始めに、ジュリア先生のインタビュー映像を見せる。インタビューから、ジュリア先生の好きな食べ物や要望を聞き取る。こうすることで、児童はジュリア先生のためにという目的意識をもって活動に取り組むことができると期待している。

オリジナルピザを作る活動については、ペアでお店屋さんごっこのような学習活動を行う。お店の店員とお客という設定のもと、やり取りを行う。本時では、お客役の児童が欲しいものや数について伝え、店員役がそれらを聞き取ったり確認したりしながら、自然なコミュニケーションが成立するようにする。

② 質問や反応を手助けする教具や掲示の工夫

相手とやり取りを楽しみ、安心して会話をするために、質問や反応を充実させたい。そこで、単元を通して質問の例が書いてあるカードを使用したり、反応の例を示した学級掲示を活用したりする。やり取りをする中で、児童がいつでもヒントとして見られるようにすることで、質問や反応の仕方を身に付けさせたい。

(3) 展開

時間 (分)	学習活動	教師の働き掛け 予想される児童（生徒）の反応	□評価 ○支援 ◇留意点
ウォーム アップ 5	- 新出単語の復習をする。 - チャンツをする。	リピートさせたり一斉に言わせたりするなど、活動に変化をつけて練習させる。	○言いづらそうな単語はゆっくりと言ったり複数回繰り返したりして練習する。 ◇テンポや声の大きさを大切にさせる。
導入 5	オリジナルピザをつくるための意識付けをする。	ジュリア先生の好きな食べ物や好みについて聞き取る。 【インタビュー映像の例】 Hi. I'm very hungry. I want to eat pizza. I like tomatoes and corn. But I don't like green papers. I want to eat healthy pizza. C ジュリア先生はトマトやコーンが好きなんだね。	◇インタビューの中で何を聞いてほしいか児童に伝える。 ○内容について、児童の様子を見て日本語で説明する。 ○聞き取った内容について確認し、板書する。
展開 ① 3	◎どんなやり取りをすると、ジュリア先生のためにピザが作れるのか。		
6	【個人思考】 オリジナルピザを考える。	タブレットを使用してオリジナルピザを作る。 C1 野菜をたくさんにしようかな。 C2 ピーマンは苦手と言っていたから入れないようにしよう。	○インタビューの内容を想起させる。
5	【ペア活動】 1回目のやり取りを行う。	C1 Hello. I want pizza. I want tomatoes. C2 How many tomatoes do you want? C1 Three, please. C2 O.k. Anything? C1 I want sausages. C2 How many? C1 Two, please. C2 Thank you.	○最初に児童の代表と指導者とでやり取りのモデルを示す。 ○掲示やカードを参考にして、反応や質問をするよう促す。 ◇ペアの一方が欲しい食材や個数を尋ねる。もう一方は聞き取った内容をもとに、ピザを完成させる。 ○食材や食材の個数が正しいか答え合わせをさせる。
5	【中間指導】 1回目のやり取りの振り返りを行う。	T ピザを完成させるためにどんなやり取りをしましたか。 C 数を聞いた。 C うなずいたりリアクションを取ったりして聞いていた。	◇ペアを変えて何度か繰り返させる。 □進んで質問したり反応したりすることができたか。 (活動の様子、動画)
展開 ② 16	【ペア活動】 2回目のやり取りを行う。	質問や反応について、頑張りたいことを考えさせてから2回目のやり取りを行う。 T さっき、みんなで確認したやりとりの仕方を生かして、あと二人とやり取りをします。 C 次はもっと反応しよう。	◇1回目のやり取りの振り返りが生かされているか。

まとめ 5	・振り返り	C いろいろな人とペアを組んで話したとき、進んで質問することができてよかったです。	□進んで質問したり反応したりすることができたか。 (振り返り)
----------	-------	---	------------------------------------

(4) 評価

A：発話に反応したり質問したり、質問に答えたりしながら2往復以上のやり取りをしている。

B：教具を活用して、発話に反応したり質問したりしながら、1往復のやり取りをしている。

B評価に満たない児童への支援：反応カードをもとに、頑張りたいことを一つ決めさせて活動を行う。

6 実践を振り返って

(1) 授業の実際（指導の実際）

① やり取りにおける語彙や表現の習得

やり取りの場面において、児童が双方向的にコミュニケーションを行えるようにするため、発話に対して質問したり反応したりできるよう目指した。チャンツや教師の後に続くリピート練習をすることに加えて、教具として「質問、反応カード」を配付、使用したり、学級掲示を活用したりした。これらの教具、学級掲示を活用したことで、児童はスムーズにやり取りを行うことができた。

振り返りからは、「友達がピザの注文を間違えたときに、“Sorry.”と言っていたのが良かった」「“Thank you.”や反応の言葉はたくさんできた」など、相手に配慮しながらコミュニケーション活動を進める児童の姿が見られた。

② 児童の意欲を高める言語活動の設定

本時では、ALTの先生が喜ぶであろうピザを作るという言語活動を設定した。児童はALTのインタビュー映像の視聴を通して、ALTが好きな食べ物、苦手な食べ物、どんな種類のピザを食べたいのかということ聞き取った。映像の視聴から、既習事項を生かして好きな食材、苦手な食材を聞き取ったり、ヘルシーなピザとはどんなピザなのか共通理解を図ったりした。児童の振り返りからは、「ALTの先生が言っていた好き嫌いを思い出しながらピザを作った」という記述が見られ、児童にとって活動への意欲を高める言語活動になったことが考えられる。

(2) 研究テーマに関わる評価

研究テーマに関する評価結果は以下の通りである。（図1、2）

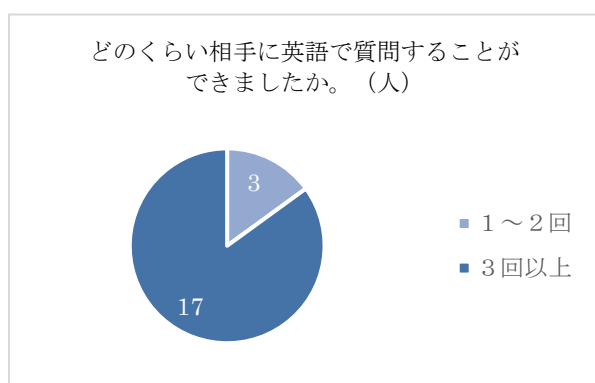


図1

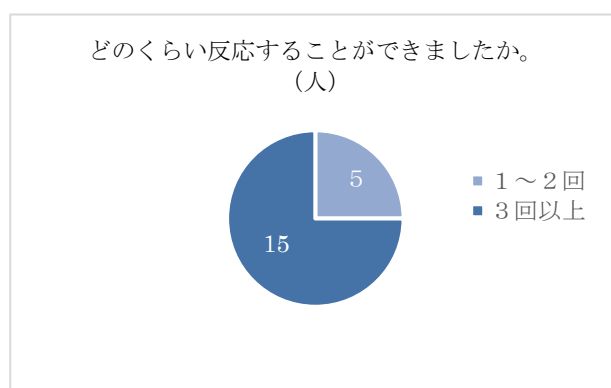


図2

- ① 相手の発話に対して、3回以上、質問することができた児童の割合は85%（20人中17人）であった。やり取りの記録や振り返りにおける自由記述を見ると、「I see. や Really? と反応することができた」「いくつあるのかを忘れずに聞くことができた」という記述が見られた。このことから、児童に配付した質問・反応カードの手立てが有効であったと考えられる。
- ② 本単元では、ALTの先生のためにピザを作るという言語活動を設定した。児童は、ALTの先生のためにピザを作るという目的意識やALTの先生が何を求めているのか、食材の好き嫌いはあるのかという状況を考えた。やり取りの記録から、「トマトが好きだと話していたから、トマトをたくさん使おう」「ピーマンは苦手と言っていたから選ばないようにしよう」「ヘルシーピザとはどんなピザだろう」などと試行錯誤しながら活動した。このことから、ALTの先生のためにピザを作るという言語活動が、児童にとって外国語を使う必然性のあるものになっていた。また、児童がピザ屋の店員とお客のような役割に分かれて活動したことが、やり取りを生む必然性を持たせられたのではないかと考える。

（３）今後の課題

① 質問や反応に慣れ親しむ指導の工夫について

本研修では、やり取りにおいて即興的に質問したり反応したりする児童の育成を目指し、児童が活動中にいつでも見られるような掲示や教具の手立てをとった。振り返りの記述から、質問したり反応したりすることができたという肯定的な記述が見られたが、やり取り中の動画を分析したり机間巡視を行ったりした際の活動の様子からは、日本語で質問したり、同じ反応を続ける児童の姿が見られた。このことは、児童がまだ質問や反応などに十分慣れ親しんでいないうちに活動に入ってしまったことに起因すると考える。

今後は、他のやり取りの場面においても、児童が即興的に質問や反応をすることができるよう、表現や音声に十分に慣れ親しんだうえで活動に臨みたい。そのために、語彙や表現を練習する場面では、児童が楽しいと感じられるように、活動に変化をつけた活動を行いたい。また、やり取りの表現を練習する際には、ペアを組んで実際のやり取りを想起させてチャンツをさせたり歌を歌わせたりして、繰り返し、表現に慣れ親しむ活動を設定したい。それを踏まえ、帯活動で外国語のやり取りを行うことで、中間指導を充実させ、質問や反応に慣れ親しませたい。

② 汎用性のある教具の工夫

本単元では、お店屋さんごっこのような活動形態をとったことで、児童が進んで質問したり反応したりすることにつながったと考える。しかし、別のやり取りの場面で同じような質問や反応ができるのか疑問である。どんな場面においても使える、汎用性のある教具を使用し、どの学年でも利用できるようにしていきたい。

〈参考・引用文献〉

文部科学省、『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』・開隆堂出版株式会社. 2018
瀧沢広人、『外国語活動&外国語の新学習評価ハンドブック』・明治図書. 2020